# 国際日本語ディベート研究会

2013 年 8 月 9 日 九州大学伊都キャンパス・センターゾーン 2310 教室

プログラム

9:00-9:10　開会式

9:10-9:50　基調講演
井上奈良彦（九州大学）「ディベート教育と研究の展望」

10:00-10:30　研究発表 1
上條純恵（國立交通大學）「日本語ディベートの取り組みの意義－台湾の第二外国語学習者を例にー」

10:30-11:00　研究発表 2
亀井克朗（興国管理学院）「ディベートへの否定的反応についての批判的考察—台湾における日本語教育の現場から」

11:10-11:40　研究発表 3
筧一彦（東京大学）「社会人を対象としたディベート教育とそこから見えるもの」

11:40-12:10　研究発表 4
山形伸二（大学入試センター）「論理的思考力の発達に及ぼすディベート教育の効果」

12:20-12:50　研究発表 5
諏訪昭宏（釜山外語大）「韓国における日本語ディベート大会の意義と課題」

12:50-13:00　閉会式

13:00　昼食

## 発表要旨

井上奈良彦
「ディベート教育と研究の展望」
　ディベートは大学、特に外国語教育においては実践活動としての認識が強いため、大学教員である指導者は自らの研究活動と実践活動の両立が困難になることがある。この発表では、ディベートに関する研究のいくつかを紹介し、今後の研究の可能性を探りたい。具体的には、ディベート学習や指導を研究対象とする以外に、ディベートの理論や戦術の研究、言語使用の分析、コミュニケーションの分析、文化事象としてのディベート活動の研究等に言及したい。

上條純恵

「日本語ディベートの取り組みの意義－台湾の第二外国語学習者を例に－」

第二外国語学習者にとって、日本語ディベートは難易度の高いものである。そこで、「なぜ日本語ディベートをするのか。」というリサーチクエスチョンをもち、今年度、台湾で行われた全国日本語ディベート選手権に出場した学生に、大会準備が本格的に始まる前と、大会後に、半構造化インタビューによりデータを収集した。音声データを文字化し、質的分析法の一つであるステップ式ＴＡＥ（Thinking At the Edge）を使って分析した。

亀井克朗

「ディベートへの否定的反応についての批判的考察―台湾における日本語教育の現場から」

日本語教育におけるディベートの普及あるいは発展を、ディベートに対する偏った見方や否定的な反応が阻害している。本発表は、台湾における日本語ディベートの現状と課題を報告するとともに、上記の見方や反応に対する応答を二つの点から考える。第一に、批判的思考を教えるディベートの理念は日本語教育においても重要であるばかりでなく、そのあり方を左右するものであること。第二に、ディベートの表面的、部分的な印象に左右される言説に対し、コミュニケーションにおける内的対話に着目し、ディベートの多様な意義と可能性を考える。

筧一彦

「社会人を対象としたディベート教育とそこから見えるもの」

ディベート教育は、学校での授業や課外活動として行なわれるだけでなく、社会人を対象として行なわれるものもある。本発表では、日本で行なわれている諸々の社会人向けディベート教育を俯瞰し、いくらかの事例における参加者からのフィードバックを分析する。その上で、対象とする受講生層ごとに異なりうるディベート教育のあり方について議論したい。

山形伸二

「論理的思考力の発達に及ぼすディベート教育の効果」

This study examined genetic and environmental etiologies of formal and informal logical thinking abilities during adolescence, and whether experience of debate class in high school influenced each of the abilities. Participants were 766 twins (133 MZ and 221 DZ pairs; age 16-18). Via anonymous postal survey, participants completed measures of formal (BAROCO-short) and informal (argumentation mapping tasks) logical thinking ability. They also reported experience of debate class and its length. Univariate genetic analyses revealed that individual differences in both formal and informal logical thinking ability were substantially influenced by genetic and nonshared environmental factors, but not by shared environmental factors ($a2 = .36$ and $.47$ for formal and informal ability, respectively). Bivariate analysis revealed that correlation between the two abilities is fully explained by genetic factors ($rG = .72$). MZ-twin-difference correlation with the length of debate class experienced was positive and significant only for informal logical thinking ability ($r = .13$, $p < .05$). These results supported generalist-genes and specific-environment hypothesis, and suggested the effectiveness of debate class in fostering informal logical thinking ability, which is more relevant in daily lives than formal counterpart.

諏訪昭宏

「韓国における日本語ディベート大会の意義と課題」

日本語学習者が多く、日本語のレベルも比較的高いと言われる韓国であるが、上級日本語学習者にとって、その実力を発揮できる場は意外と少ない。そんな中、2012 年 9 月に「第 1 回韓国大学生日本語ディベート大会」が開催された。高い評価を得た一方で、大会の拡大と継続には多くの課題が山積みである。本発表では、第 1 回大会の報告と、第 2 回大会に向けた取り組みと今後の課題について言及する。